

大学生における家族機能とアイデンティティの関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 早苗 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4864

大学生における家族機能とアイデンティティの関連

井上 早苗

臨床心理学専攻 2年

要約

本研究は、大学生の家族機能が家族内コミュニケーション、および大学生のアイデンティティの発達にどのように影響するかを明らかにすることを目的とし、大学生自身を含む自己評価による家族関係と大学生のアイデンティティの発達に関する調査、および意識化されていない家族関係の評価を行う投射法を用いた調査用紙による質問紙調査を同時に実施し、100名を分析対象とした。クラスター分析の結果、「仲良し家族」、「ホテル家族」、「平均家族」、「仮面家族」、「拘束家族」の5つのクラスターに分類された。家族機能とアイデンティティの関連について検討するために分散分析を行った結果、群間の差異は認められなかつたが、各群の家族の関係性による青年期の依存と自立の課題への影響が認められた。青年期の家族への依存と自立の葛藤が大学生のアイデンティティの発達に影響していることが示唆された。

キーワード：青年期、アイデンティティ、家族機能、依存と自立

I 問題・目的

1. 青年期の発達課題とアイデンティティ

Erikson, E. H. (1959) は、人間のライフサイクルを8段階に分け、各発達段階には課題があり、その課題を達成することが重要であると述べている。大学生はその5段階目の青年期にあたり、その発達課題は、「アイデンティティの確立」である。各段階の発達課題には、成長・健康に向かう傾向と病理に向かう傾向の対比する二つの特性がある。これらの一連の葛藤が心理社会的危機であり、青年期の心理社会的危機は「アイデンティティ拡散」であるとされている (Erikson, 1982/1989)。特に青年期は、より高次の発達途上にある段階や、より低次の既に過ぎた発達段階の課題に新たな意味を付与することによって、心理社会的課題に関する様々な葛藤を経験する。そして、アイデンティティは自分が理解している社会現実に位置づけられるようなパーソナリティを発展させているという確信を持っていくことで発達すると考えられている。

大学卒業後の進路選択は青年期における重要な課題である。大学生の進路選択時の親子間コミュ

ニケーションとアイデンティティの関連についての研究 (高橋, 2008/2009) では、進路選択時に、親と大学生の議論を避けないこと、親から大学生の進路に関する意見をはっきり伝えることが大学生のアイデンティティの発達や探求への積極的な態度に繋がるとされている。特に、社会的役割の獲得において重要なのが職業決定であり、アイデンティティ拡散は職業決定の不可能という形で最もよく現れる (下山, 1986)。下山 (1986) の知見からも進路選択はアイデンティティの発達指標として意味づけることができる。

2. 家族システムについて

近年、家族の形態や機能の変化について多くの研究がなされているが、家族についての心理学的研究の歴史は浅い。家族心理学は1980年代に確立された非常に新しい心理学の一領域であり、発達心理学と臨床心理学という二つの心理学を母体に誕生した (中釜ら, 2019)。

家族をシステムとして捉える視点は、1950年代、家族間コミュニケーションを研究していた文化人類学者 Bateson, G. により取り入れられた

(中釜ら, 2019)。家族システム理論では、家族を個々の家族成員同士の相互関係によって成り立っているシステムであるとみなす。Olson (1990) は、家族機能について、凝集性・適応性の二次元に、この二次元を促進させる働きを持つコミュニケーションを加えた家族円環モデル (Olson et al, 1979) を提唱している。家族円環モデルは、夫婦及び家族システムをタイプ別に分類し、その機能に応じて家族が変化・移行することを考慮に入れた動的な理論である。凝集性と適応性が独立した2軸の直交座標として表され、両次元における機能の程度の違いから、適切に機能する家族である「バランス群」、家族機能に問題がある「極端群」、その中間に位置する「中間群」の3群に分類できると考えられている。

3. 本研究の目的と仮説

家族機能の構成要素である凝集性と適応性は家庭内コミュニケーションの質との関連がある。また、進路選択時の家庭内コミュニケーションが大学生のアイデンティティの発達に影響することから、家族機能は、家庭内コミュニケーションを介して大学生のアイデンティティの発達と関連すると考えられる。先行研究では、大学生の進路選択に関わる親子間コミュニケーションと進路選択との関連については検討されているが、大学生の家族機能が家庭内コミュニケーションの質に影響し、さらに家庭内コミュニケーションが進路選択に影響するモデルについては検討されていない。

本研究では、大学生本人を含む家族成員の関係を、大学生の自己評価によって調査し、家族関係が家庭内コミュニケーションの質へ影響し、さらに家庭内コミュニケーションが進路選択に影響を及ぼしているか否かを上記モデルに照らして検討する。加えて、投映法を用いて大学生に意識化されていない家族関係を評価し、その相違を比較検討することにより、以下の仮説を検証することを目的とする。

- 1) 家族内葛藤の存在は進路選択に現れる大学生のアイデンティティの発達に影響する。
- 2) 自己評価による家族機能と意識化されていない

い家族機能との相違が家族内葛藤に繋がっている。

II 方法

1. 調査対象者

関西圏内の私立大学に通う大学生307名を対象に質問紙調査を2021年6月～10月に実施し、回答に不備があったものや、回収されなかったものを除く100名（男子学生31名、女子学生69名）を分析対象とした。分析対象者の約半数が大学1年生、あるいは2年生で、平均年齢は19.7歳（SD=1.02）であった。

2. 使用尺度

1) ICHIGEKI (野口ら, 2009)

家族構造を「結びつき」「勢力」「利害関係」「開放性」「葛藤」「社会的興味」「統制力」「ルール」の8因子から成るとし、1因子に対して1評価項目で構成されている家族機能の評価のための尺度である。先行研究（野口ら, 2009）では、家族円環モデル (Olson et al, 1979) に基づき、凝集性と適応性の2要因から家族機能を測定するFACES-III（草田・岡堂, 1993）とICHIGEKIの各因子間において相関分析を行った結果、対応しているそれぞれの因子間に正の相関があり、ICHIGEKIの妥当性が示された。本研究では、大学生の自己評価による家族機能を検討するため用いた。

各因子の概念について、「結びつき」はお互いの仲の良さや親密さ、「勢力」は決定力や影響力、「利害関係」は自分に何か得られるものや興味がある時だけ関わり合うといった利害状況における関係性、「開放性」は家族以外の人との関わり、「葛藤」は相手との衝突の大きさや頻度、「社会的興味」は社会一般的な雑談の頻度、「ルール」は家庭内における規則の多さや強さ、「統制力」は家庭内の状況把握やコントロールを示している。

2) 職業未決定尺度（下山, 1986）

大学生の職業決定に対する意識全般を評価する尺度であり、38項目6因子で構成されている。

本研究ではアイデンティティの発達の程度を検討するために用いた。

各因子の概念について、「未熟」は職業意識が未熟なため、将来の見通しが無く、職業選択に取り組めないでいる状態、「混乱」は職業決定に直面して不安になり、情緒的に混乱している状態、「猶予」は職業決定を猶予して職業について考えたくない状態、「模索」は職業決定に向かって積極的に模索している状態、「安直」は自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうとする安易な職業決定、「決定」は職業の既決を示している。

3) PF スタディ

投映法である青年期用 PF スタディから 8 場面を抽出し、夫婦場面、母子場面、父子場面、両親と子の場面の家族場面に描き替えたものを大学生自身に意識化されていない家族関係を評価する目的で用いた。「これから示す 8 つの場面は、家族との会話の場面です。吹き出しのある人がどのように答えるのか、最初に思いついた言葉を空欄の吹き出しに書いてください。」と教示を行い回答欄に自由に記述するよう求めた。

3. 手続き

対象者が受講している授業終了後、質問紙を対

スタディの順に配置し、質問紙を作成した。

III 結果

1. ICHIGEKI のクラスター分析

野口ら（2009）に倣い、各評価項目における父子間、母子間、夫婦間の評価点を得点とし、さらにこの 3 つの関係の平均を求め、下位尺度得点とした。全対象者の ICHIGEKI の各下位尺度得点の平均値を表 1 に示す。

表 1 ICHIGEKI の下位尺度の平均値・標準偏差

下位尺度	n=100	
	平均値	標準偏差
結びつき	6.55	1.87
葛藤	4.16	1.96
社会的興味	5.10	2.15
勢力	5.46	1.29
利害関係	3.96	2.15
開放性	3.95	2.15
統制力	5.79	1.50
ルール	3.71	2.10

ICHIGEKI の 8 下位尺度得点によるクラスター分析を行ったところ、100 名の対象者を 5 つのクラスターに分類することができた。各クラスターの対象者と ICHIGEKI の 8 つの下位尺度得点を表 2 に示す。

表 2 各クラスターにおける ICHIGEKI8 因子の分散分析結果

	第Ⅰクラスター (n=28)	第Ⅱクラスター (n=29)	第Ⅲクラスター (n=22)	第Ⅳクラスター (n=5)	第Ⅴクラスター (n=16)	F値
結びつき	7.02	4.85	7.89	8.53	6.31	18.08 **
葛藤	2.93	4.68	4.47	2.20	5.58	8.95 **
社会的興味	4.13	3.76	6.79	7.47	6.19	16.46 **
勢力	5.04	5.03	5.95	5.60	6.25	4.37 **
利害関係	2.11	5.47	2.70	6.87	5.28	33.24 **
開放性	2.81	3.56	5.58	7.40	3.31	13.31 **
統制力	5.32	5.48	6.27	6.00	6.42	2.42
ルール	3.00	2.00	4.00	4.00	6.00	20.60 **

** p<.01, * p<.05

象者に配布し、教示を行う前に、調査への参加は任意であること、回答しない場合にも不利益は生じないこと、調査結果は研究の目的以外で使用しないことを説明した。その後、教示を行い、回答を求めた。回答時間は 20 分程度であった。尺度については、職業未決定尺度、ICHIGEKI、PF

クラスター間の下位尺度得点の差異を調べるため分散分析を行ったところ、「結びつき」($F(4, 95)=18.08, p<.01$)、「葛藤」($F(4, 95)=8.95, p<.01$)、「社会的興味」($F(4, 95)=16.46, p<.01$)、「勢力」($F(4, 95)=4.37, p<.01$)、「利害関係」($F(4, 95)=33.24, p<.01$)、「開放性」($F(4, 95)=13.31, p<.01$)

$p < .01$), 「ルール」 ($F(4, 95) = 20.60, p < .01$)においてクラスター間に有意差が見られた。

各クラスターの各因子の平均点を比較すると、「第Ⅰクラスター」では、葛藤の得点が平均よりも1.23低かった。「第Ⅱクラスター」では、結びつき、社会的興味の得点が各クラスター間で最も低かった。「第Ⅲクラスター」では、各因子の得点がすべて平均に近かった。「第Ⅳクラスター」では、結びつき、社会的興味、利害関係、開放性の得点が平均よりも1SD高く、葛藤の得点が平均よりも1SD低かった。「第Ⅴクラスター」では、ルールの得点が平均よりも1SD高かった。こうした平均値の特徴に基づき、5つのクラスターについて、その定義を行った。

2. ICHIGEKIの回答によって分類された各家族群の定義

ICHIGEKIの回答により、クラスター分析を行った結果、5群に分類することができた。各群の定義を下記に示す。

1) 第Ⅰクラスター：「仲良し家族」

葛藤の得点が低く、家族同士の衝突が少ないことが特徴である。家族内で衝突を避けるためにお互いに気を遣ったり、話し合いをすることが多く、家族の関係性が良いと感じられる状態が重視される。そのため家族内での揉め事も少なく、家族成員間の仲が良いと考えられる。以上のことから第Ⅰクラスターは「仲良し家族」と定義した。

2) 第Ⅱクラスター：「ホテル家族」

結びつきと社会的興味の得点が低く、家族内の会話が少なく、家族成員間があまりお互いの仲の良さや親密さ、連帯感を感じることがない家族であると考えられる。小此木（1986）は、「なんでも思うようなサービスを受けることのできる高級ホテルとみなし、自分たちは皆お客様だと思い込んでいるような家族」を「ホテル家族」と定義している。家族成員同士がお互いに感情的になることや干渉することではなく、相互に細かい気持ちのやり取りをすることはないと考えられる。

家族間での衝突のなさ、家庭内での繋がりのなさが特徴的であり、小此木（1986）が示した「ホ

テル家族」の特徴と類似している部分が大きいため、第Ⅱクラスターは「ホテル家族」と定義した。

3) 第Ⅲクラスター：「平均家族」

ICHIGEKIの下位尺度の得点が、全て平均に近かった。調査対象者の中の平均的な家族を示しているクラスターであることから、第Ⅲクラスターは「平均家族」と定義した。

4) 第Ⅳクラスター：「仮面家族」

結びつき、社会的興味、利害関係、開放性の得点が高く、葛藤の得点が低い家族である。家族内での会話が多く、仲が良くて家族同士での衝突が少ないが、家族以外の人との関わりが多く、家族同士が自分に何か得られるものがある時だけ関わる利害のために一緒にいると意味づけられる関係性の家族だと考えられる。小此木（1986）は、家族がそれぞれの演技を競う劇場であり、お互いに演技者として他の家族成員や家族外の他者の拍手喝采を浴びようと一生懸命になっているような家族を「劇場家族」と定義した。

第Ⅳクラスターでは、家族同士がお互いに、良い家族であろうするために家族間の仲が良く、考え方の衝突がないように捉えているが、各成員が利害関係を介した結びつきであるため、他の家族に自分たち家族の良い所を見せるために家庭内コミュニケーションを活発にしたり、観客の役割をする友達を家に連れてくることで関係性を確認する必要があると考えられる。しかし、ICHIGEKIの質問項目からは家族成員としての自己評価のみならず、周囲からも良い家族と思われたいのかという点は明確に抽出できないため、第Ⅳクラスターは「仮面家族」と定義した。

5) 第Ⅴクラスター：「拘束家族」

ルールの得点が高く、家庭内における規則の多さや強さが特徴である。家庭内で誰かの決めたルールがあり、そのルールに沿って生活していることが考えられる。様々な家庭内のルールに拘束されていることから、第Ⅴクラスターは「拘束家族」と定義した。

3. ICHIGEKIと職業未決定尺度の関連

職業未決定尺度について、下山（1986）に倣い、

各下位尺度における評価点の合計点を求めた。全対象者の職業未決定尺度の各下位尺度得点の平均値と標準偏差を表3に示す。

表3 職業未決定尺度の各下位尺度の平均値・標準偏差

下位尺度	<i>n=100</i>	
	平均値	標準偏差
未熟	11.18	3.91
混乱	12.41	3.75
猶予	16.04	4.45
模索	10.68	2.83
安直	15.02	3.25
決定	9.45	2.35

ICHIGEKIの得点に基づくクラスター間で、職業未決定尺度の各下位尺度得点に差があるか否かを検討するために分散分析と多重比較を行った。その結果、クラスター間において職業未決定尺度の各下位尺度得点に有意差は見られなかった。分散分析の結果を表4に示す。

表4 各クラスターにおける職業未決定尺度6因子の分散分析結果

	第Ⅰクラスター (n=28)	第Ⅱクラスター (n=29)	第Ⅲクラスター (n=22)	第Ⅳクラスター (n=5)	第Ⅴクラスター (n=16)	F値
未熟	10.96	11.07	11.27	10.60	11.81	0.16
混乱	13.07	11.79	13.00	13.00	11.38	0.88
猶予	16.61	15.28	15.59	15.80	17.13	0.62
模索	9.93	11.55	11.00	10.40	10.06	1.48
安直	14.75	14.48	16.14	14.80	15.00	0.90
決定	10.32	9.28	8.68	8.80	9.50	1.74

***p*<.01, **p*<.05

表6 ICHIGEKIとPFスタディの回答による各家族群の対象者数

	ICHIGEKIの回答による家族群				
	仲良し家族	ホテル家族	平均家族	仮面家族	拘束家族
仲良し家族	20	1	3	0	1
PFスタディ ホテル家族	6	22	3	0	5
の回答に 平均家族	2	5	15	2	0
による各 家族	0	1	1	3	2
族群 拘束家族	0	0	0	0	6
分類不能	0	0	0	0	2

4. PFスタディによるクラスターの分類

次に、PFスタディへの回答において現れる、意識化されていない家族機能を、ICHIGEKIの得点に基づく5つのクラスターに分類することを試みた。この分類は調査実施者を含む臨床心理学

の専門知識を持つ3人で合議のうえ行った。PFスタディの回答内容によって分けられたクラスターの対象者数を表5に示す。

表5 PFスタディにおける各クラスターの対象者数

第Ⅰクラスター	25
第Ⅱクラスター	36
第Ⅲクラスター	24
第Ⅳクラスター	7
第Ⅴクラスター	6
分類不能	2

その上で、対象者の中で、ICHIGEKIの各因子の得点に基づく、自己評価の家族機能によるクラスターと、PFスタディへの回答において現れる、意識化されていない家族機能によるクラスターが異なるのか検討した。ICHIGEKIの各因子の得点に基づく各家族群の対象者数と、PFスタディの回答内容により分けられた各家族群の対象者数を表6に示す。

以下に、分類された家族クラスターごとに、PFスタディの回答に認められる特徴としてピックアップした内容について記述する。

1) 第Ⅰクラスター：「仲良し家族」

8場面の回答は、相手の発言に納得を示す回答

が多かった。家族が怒りを表出しても、謝ったり、受容したりすることによって、家族内で衝突が起こりにくく、良好な関係が維持される。家族成員間に表出された攻撃性は、それを吸収するような他の成員の言動と対になることにより、家族内の衝突が起こりにくい特徴が見られる。

2) 第Ⅱクラスター：「ホテル家族」

両親の発言に子どもが反発する回答が多かった。家族内の結びつきが希薄であり、家族成員がそれぞれの生活をそれぞれのやり方で過ごす傾向があるため、家族成員個々の利益が優先され、関係を保つことや相手に対する思いやりなどは示されない。自分の生活のペースを乱すことや不快を感じることがあればすぐに相手に言い返している。

3) 第Ⅲクラスター：「平均家族」

「うん」等の短い回答や、各クラスターの特徴が入り混じっている回答が多かった。平均家族では、家族関係を一つのパターンにまとめるのは困難であるが、家族成員の発言を受容するコミュニケーションが多いため、一定の距離感が保たれている。

4) 第Ⅳクラスター：「仮面家族」

各場面で葛藤状況に適応しようとする、過度に良い子を演じる等、一般的に理想とされる回答が多かった。本当は言いたいことがあったとしても、それを言語化することはなく、本音を言って家族が衝突するのであれば、自分の意見は言わずにその場だけやり過ごし、理想の家族を演じる家族員の在り方が認められた。

5) 第Ⅴクラスター：「拘束家族」

自分がしたいことはあるが、あらかじめ決められている家族内の決まりごとがあり、暗黙のルールに従うしかないと家族が捉えている。家族成員全員が相互に拘束し合う関係にある。そのため、仕方のないことであるとあきらめの含みを持つ回答が多かった。

IV 事例検討

ここでは、各家族群における、ICHIGEKI と PF スタディの回答内容が一致している対象者の

事例について検討していく。

1. 「仲良し家族」：A (21歳、男子、大学3年生)

①職業未決定尺度の回答について

「どちらともいえない」との回答が多く、大学卒業後の進路選択について明確に決定していないと捉えられる一方で、職業については自分で考え、自分の望む職業に就きたいと考えている。つまり、職業選択について、まだ決定することはできていないが、自分がしたい仕事、自分の力で就職したいと感じているといえる。

②ICHIGEKI の回答について

家族成員間において得点差はあまりないが、結びつき、社会的興味の得点が中程度、葛藤の得点が低いことから、家族内での衝突は少ない。また、家族内で積極的にコミュニケーションをとる訳ではないが、ある程度の情緒的絆があり、安定した家族関係だと考えられる。ルールの得点が低いことから、家族が暗黙の了解等に縛られることがほとんどなく、家族成員が互いに干渉することがない家庭であると考えられる。

③PF スタディの回答について

全ての反応において、素直に相手の言っていることを受け入れる回答が見られた。A は家族に素直に従うことによって葛藤を生じさせないと考えられる。

④まとめ

仲良し家族は家庭内葛藤の低い家庭であることが窺える。ある程度の情緒的繋がりがあり、コミュニケーションもとるが、互いに干渉するのではなく、家族成員がそれぞれに自立していると考えられる。家族成員間で、情緒的繋がりが強すぎたり、希薄だったりするのではなく、凝集性のバランスがとれており、家族成員が互いに依存し合はず、それが自立しているため、A はアイデンティティの確立には至っていないが、自立に向けて準備している段階であると考えられる。

2. 「ホテル家族」：B (21歳、男子、大学3年生)

①職業未決定尺度の回答について

大学卒業後の職業選択については自分で考えてはいるが、まだ職業決定には至っていない回答が見

られた。

②ICHIGEKI の回答について

家族成員間での結びつき、社会的興味の得点が低く、葛藤の得点が高いことから、Bは自身の家庭は不仲であり、家族の関りも希薄だと捉えていることが窺える。また、利害関係の得点が高く、開放性の得点が低いことから、情緒的繋がりから家族が一緒にいるのではなく、利害が関係を支えており、さらに、外部の人との交流も少なく、家族成員がその閉鎖性故に互いに依存し合っている関係性だと考えられる。

③PF スタディの回答について

相手が言ったことを受け流すような回答が多かった。家族の情緒的繋がりは強くないため、家族成員の関係の悪化を招く衝突が起こりにくいコミュニケーションが行われていると考えられる。

④まとめ

「ホテル家族」は、家族内コミュニケーションが少なく、家族成員間相互のつながりを感じられない家族であるが、Bは家庭をそのようなものであると捉えていると考えられる。Bは、家族は利害のために一緒に住んでおり、その意味で家族を必要とし、依存関係が窺える。自立のために家族への依存から抜け出そうとしているが、まだ家族を必要とし、現在の家族関係の喪失には耐えられない段階であると考えられる。

3. 「平均家族」: C (21歳、女子、大学3年生)

①職業未決定尺度の回答について

職業決定について自分の思うように進まず、焦る気持ちがある事が窺える。また、就業に対する不安や、自分が将来何をしたいのか、どうしたらよいのか分からないと感じており、Cのアイデンティティは未発達であると考えられる。

②ICHIGEKI の回答について

結びつきの得点は高く、社会的興味の得点は中程度であった。特に母子間において、結びつきと葛藤の得点が高かった。統制力の得点は母親が最も高く、家庭内の情緒的結びつきは強いが、家族内コミュニケーションが頻繁にされる訳ではないと考えられる。さらに、Cは特に母親との衝突は

あるが、情緒的結びつきも強く、母親の影響力が強い家庭であることが窺える。

③PF スタディの回答について

母親をかばうような回答が多く、強く言い返す回答は見られなかった。母親の発言力や家庭内で母親の影響力の大きさが窺える。

④まとめ

平均家族は、クラスター分析の結果からは明確な特徴は見られなかった。Cの家族の特徴として、家族内での情緒的繋がりは強く、凝集性は高いが、家族内コミュニケーションは積極的でなく、母親の影響力が大きいことが特徴的であった。Cは普段から、母親の意見に従うことによって、母親に同一化し、自分の考えなどを示す機会が少ないと未だ母親に依存している。このことがCのアイデンティティの未発達に繋がっていると考えられる。

4. 「仮面家族」: D (18歳、女子、大学1年生)

①職業未決定尺度の回答について

大学卒業後の職業選択について、まだ想像できていないとみられる回答が多かった。Dは大学に入学したばかりであり、卒業までに時間があるため、大学卒業後の職業選択への動機づけが十分にないと推測される。また、Dは自信がなく、自分がどういう人物なのか分かっておらず、アイデンティティを確立させる前の段階であると考えられる。

②ICHIGEKI の回答について

結びつき、社会的興味の得点が高く、葛藤の得点が低いことから、家族内での情緒的繋がりが強く、家族内コミュニケーションも頻繁であるが、家族成員間で衝突することがほとんどない。しかし、利害関係の得点が高く、Dは家族成員との生活にはメリットを感じており、自分も他の家族に何らかの利益をもたらしていると捉えている。

③PF スタディの回答について

全ての回答において、相手に言い返すような発言はなく、親切に振る舞い、気遣いが感じられる。その場面では、理想とされる反応をすることで、家族の関係性を良いものにしたいとDは感じて

いることが窺われる。

④まとめ

「仮面家族」は、家族関係が良好で理想的な家族だと捉える一方で、利益があるがゆえに一緒にいると感じている家族である。Dは家族の仲が良く、家族内でコミュニケーションも頻繁にとり、自分の家族は理想的であると思う一方で、メリットがあるため家族で生活していると感じている側面が見られる。家族の凝集性は高いが、依存や援助を求める関係になっていることが推測される。また、D自身、自立について考える時期に至っておらず、Dのアイデンティティの確立は、まだ先の課題であると言える。

5. 「拘束家族」：E（21歳、女子、大学4年生）

①職業未決定尺度の回答について

回答からは職業選択に対する意欲の低さが見られる一方で、大学卒業後の職業選択について焦っていることが示されている。自分の将来したいことや自分の適性についてはまだ模索中であるとの回答が見られた。

②ICHIGEKIの回答について

夫婦間の結びつき、社会的興味、葛藤の得点が高かった。夫婦間に衝突はあるが、情緒的繋がりもあり、親子間よりも夫婦間でのコミュニケーションを頻繁にとると考えられる。つまり、世代間境界が明確な家庭であり、ルールの得点が他の家族群と比較すると高いこと、母親の統制力の得点が最も高いことから、母親の影響力が大きく、青年期でありますながら親子関係には幼少期から大きな変化がなく、子どもが親に対して反抗することはあまりないと考えられる。

③PFスタディの回答について

自己主張することなく、相手の反応を待っている反応が多かった。家族に不満があってそれを相手に伝えないと考えられる。相手の言うことに従ったり、反応を窺ったりすることで、自分の意見を示さずに対応している。周囲の家族に合わせるために、何かを判断するときは、自分で決めずに家族に委ね、主体制の弱い行動様式が認められる。

④まとめ

拘束家族は家庭内のルールに従う傾向が強い。Eの回答からは、家庭内でのルールはあるが、世代間境界が明確で上の世代に従う構造が見られ、周囲の反応に合わせたり、不満があっても従ったりしていることから、自分で判断することが苦手であると考えられる。井上（1975）は、親が支配的で子がその親の態度に依存し、服従して育ってきた場合には、子どもは自己主張をしたり、自ら意思決定したりする機会が乏しいため、青年期になんでも社会の要求する自立的反応を形成するのに困難が生じると述べている。Eは家族の意見に従って過ごしてきたため、家族から自立をしていく時期に自らの生き方を選択することが難しく、アイデンティティの確立に至るには困難を伴うと考えられる。

V 総合考察

1. 仮説について

仮説1)については、上記の青年期の家族への依存と自立の葛藤が大学生のアイデンティティの発達に影響していると考えられた。しかし、青年は友人や大学の先生など、様々な価値観や生活背景を持つ人々にも相談した上で大学卒業後の進路選択をしていくことから、家族機能は青年の進路選択に直接影響を及ぼさないことが明らかとなった。

仮説2)について、本研究では自己評価による家族機能と意識化されていない家族機能を質問紙と投映法により評価したが、両者に相違のある対象者はあまり見られなかった。また、各群において、家族関係の良好さを否定するような回答はなかった。家族成員間の情緒的繋がりは、家族に対する依存を意味するが、情緒的繋がりが弱い場合であっても家族といふことの利益があるため、家族との分離を積極的に図ることがなく、いずれにしても手放し難いといえる。家族からの分離は青年自身に葛藤を生じさせるため、回避されている可能性もあると考えられる。

2. 大学生の家族機能と家族内コミュニケーション、アイデンティティの発達の関連

ICHIGEKI の回答で評価された家族関係についての得点のクラスター分析を行った結果、「仲良し家族」、「ホテル家族」、「平均家族」、「仮面家族」、「拘束家族」の 5 群に分類することができた。この 5 群における職業選択の各下位尺度に関する分散分析を行った結果、いずれにも差異は認められなかった。白石・岡本（2005）の研究では、大学生のアイデンティティの確立には家族機能は影響を及ぼすが、進路選択や職業選択に関しては、直接の影響を認めないとされており、本研究でも家族機能が大学卒業後の職業選択に影響を及ぼさないことが示唆された。職業選択をアイデンティティ発達の一つの指標と捉えるのであれば、本研究においては、家族機能がアイデンティティ発達に与える影響は認められなかっことになる。

各群についてケースを取り上げて検討していくと、家族機能が青年の自立に及ぼす影響が見られた。大学卒業後の職業選択は、青年が自立していく重要な過程であり、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立に大きく関わっている。

例えば、凝集性のバランスが取れており、家族成員それぞれが自立し、青年も家族から自立の途上にある段階の場合、家族内コミュニケーションには受容傾向が見られ、家族に受容される経験は、葛藤に耐えて自立することに繋がると考えられる。また、青年は、家族関係は良好であると捉えているが、相互の利益のために一緒にいる場合、青年は家族を利用する対象として依存しており、自立は依存対象の喪失、即ち損失を意味するため、抵抗が生じると考えられる。

3. 意識化されていない家族関係について

本研究では、青年の自己評価による家族関係と意識化されていない家族関係については、ほとんど相違が見られなかった。青年が自分の家族を客観視し、現実的に捉えることができており、心理的自立につながる家族員との関係性に一定の距離感があるためだと考えられる。心理的自立の準備が進む中、青年は職業選択を自らの課題として家

族員から距離を取ってその課題に向かおうとする傾向があり、家族機能が職業選択に直接影響を及ぼさない要因の一つであると考えられる。

4. 今後の課題

本研究では、青年が捉えた家族機能をもとに青年期のアイデンティティの発達について検討したが、青年期の発達課題である依存と自立に関しては、青年が家族との依存関係から自立できていないのか、家族機能の在り方が青年の家族への依存を促しているのか明確に結論づけることができなかった。青年期は前発達段階までの家族との依存関係を抜け出して、精神的にも自立に向かう段階である（山下、1975）。大学卒業後の家族からの自立を目指す一方で、自立への不安があり、家族に依存したいアンビバレントな気持ちを抱えている。本研究での調査対象者の大半を占める大学1年生の対象者においては、まだ家族からの自立について十分に考える時期ではなく、家族への依存が維持されていると考えられた。この点を検討するためには、今後、別の家族員による家族機能の検討を加え、家族機能をより詳細に把握することが必要である。

文献

- Erikson, E. H. (1959). *Psychological Issues: Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. 小此木啓吾(訳) (1973). 自我同一性. 誠信書房.
- Erikson, E. H. (1982). *The Life Cycle Completed: A Review*. W.W.Norton & Company, N. Y. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) (1989). ライフサイクル、その完結. みすず書房.
- 井上健治 (1975). 第3編2章 青年の対人関係. 井上健治・柏木恵子・無藤清子(編) 青年心理学. 有斐閣大学双書, pp. 235-250.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 心理検査学—臨床心理検定の基本—. 稲内出版.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2019). 家族心理学〔第2版〕—家族システムの発達と臨床の援助 Family Psychology, 2nd ed., 有斐閣

- 斐閣ブックス.
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文 (2009). 家族構造測定尺度—ICHIGEKI—の作成と妥当性の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 247–265.
- 小此木啓吾 (1986). 家庭のない家族の時代. 集英社文庫.
- Olson, D. H. (1990). Family circumplex model: Theory, assessment and intervention. *Japanese Journal of Family Psychology*, 4, 55–64.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H. & Russell, C. S. (1979). Circumplex Model of Marital and Family Systems: I Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types, and Clinical Applications. *Family Process*, 18, 3–28.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究, 34, 20–30.
- 白石尚大・岡本祐子 (2005). 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連. 青年心理学研究, 17, 1–13.
- 高橋彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究, 16, 159–170.
- 高橋彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究, 17, 208–219.
- 山下栄一 (1975). 第I編3章 青年期に関する諸学説. 井上健治・柏木恵子・無藤清子(編) *青年心理学*. 有斐閣大学双書, pp. 46–62.